宮崎県立看護大学研究紀要20（1）：63～73，2020

資料

「卒業研究ルーブリック評価」作成の試み

久野暢子，長鶴美佐子，川村道子，勝野絵梨奈，栗原保子

【要旨】

宮崎県立看護大学（以下，本学）における「卒業研究」は，4年間の学びの集大成として最終学年の全学生が履修する科目であり，学生の主体的な取り組みが求められる。成果物としての卒業研究論文がパフォーマンス課題としての性質を持つことや，指導教員の専門性や採用する研究手法の違いがあることから，教育内容や評価に課題が残されていた。そこで今回，学生の主体的な学修を促し，客観的で公平な成績評価をするための教育ツールとして「卒業研究ルーブリック評価（以下，卒研ルーブリック）」の導入に向けて評価表の作成を行った。作成の準備として，取り組むメンバー全員がルーブリック評価に関する一定の知識を持ち，完成図に対する共通イメージを抱けるように，関連研修の受講や先行研究の精読を行った。作成の実際では，評価観点である到達目標を学力の3要素を包含するよう見直すとともに，学生が主体的に取り組むために到達目標の下位項目として「内容項目」を設定した。また，各研究デザインや教員の専門分野に左右されないよう，共通性の高い表現になるよう工夫した。評価基準である到達レベルは，学生や教員が共通認識できるよう，本学の成績評価区分である「到達目標90-100％達成」~「到達目標60％未満」を採用した。作成の過程においては，出来上がった「卒研ルーブリック」が“絵に描いた餅”とならぬよう現実との乖離を避けるために，これまでの学生の論文作成状況と幾度も照らし合わせ，また，活用しやすい簡便さを追求した。今後は，この卒研ルーブリックの運用ならびに評価を行い，より一層学習効果を上げ，客観的で公平な成績評価ができるものに改定していきたい。

【キーワーズ】 卒業研究，ルーブリック評価，パフォーマンス課題，学士課程

Ⅰ．はじめに

宮崎県立看護大学（以下，本学）における「卒業研究」は，「看護研究Ⅰ」「看護研究Ⅱ」での学びを基盤としてすべての学びを統合させ，卒業研究論文としてまとめる科目である。すなわち，成果物である卒業研究論文は，さまざまな知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題である「パフォーマンス課題[1]ともいえる。パフォーマンス課題の評価は，“正誤問題，多肢選択問題などの「客観テスト」とは性格が異なる”[2]ため，客観性・公平性という点で難しさがある。

卒業研究に関してはこれまで，上述した成果物としての評価の難しさに加え，教員の専門性や得意とする研究デザインの違いなどが影響することによる指導のばらつきが懸念されていた。また，学生にとっては論文作成がそれまでの学修スタイルとは大きく異なる初めての取り組みであるため主体的な取り組みが難しく，これも課題となっていた。これらの課題を解決するため，主体的な学修を促し，客観的で公平な成績評価を行う教育ツールである「ルーブ

Nobuko Hisano，Misako Nagatsuru，Michiko Kawamura，Erina Katsuno，Yasuko Kurihara：宮崎県立看護大学

リック評価を導入することになった。

本稿は，筆者らが教務委員会の下部組織である「成績評価ワーキンググループ（以下，WG）のメンバーとして「卒業研究ルーブリック評価（以下，卒研ルーブリック）」を作成した過程を記すものである。今後，この卒研ルーブリックの改定を行う場合，あるいは同様のルーブリック評価を作成するうえでの基礎資料となることを期待する。

Ⅱ．ルーブリック評価

ルーブリック評価とは，我が国では2008（平成20）年の中教審答申のころから注目されている評価方法の１つである[3-6]。2012（平成24）年中教審「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）－用語集－」[7]によると，ルーブリック評価とは“米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり，評価水準である「尺度」と，尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより，他の手段では困難な，パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ，評価者・被評価者の認識の共有，複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある”ものである。もっとも単純なルーブリック表の様式では，課題・評価尺度（達成レベル・成績評価点）・評価観点（課題が求めている具体的なスキルや知識）・評価基準（具体的なフィードバック内容）のすべてが表形式で配置される[8]。ルーブリックの作成は“この課題が完成された時，学生たちはどの特定の学習目標を達成できるだろうかという期待”[9]を表現することといえる。

ルーブリック評価では，評価者（教員）と非評価者（学生）が，“何を学ぶのか”を共有し，複数で評価する場合，評価の一貫性の確保のメリットがあるともいわれる。学修者はルーブリック表を確認することで学修の段階を自己評価できるとともに次の目標を見いだすことができるため，主体的な学修を促すことができる。すでに導入している他大学の報告[10-11]もあり，その有用性は確認されている。

Ⅱ．卒研ルーブリックの作成

１．2017（平成29）年度までの「卒業研究」の位置づけと展開

「卒業研究」は，「看護研究Ⅰ（4セメスター）」「看護研究Ⅱ（5セメスター）」を履修した学生が4年次に通年（7・8セメスター）で学ぶ必修科目であり，単位数は3単位である。科目の目的は「看護研究で学んだことを前提に，学生個々が研究テーマの決定，研究計画，研究への取り組み，論文作成，発表までの過程をたどる。その体験を通して自らの疑問を解明していくことの意味やおもしろさを経験する。さらに，学生が将来にわたって看護研究に関心を深めることができるように研究的態度を身につける」である。到達目標は，①研究テーマは看護的な経験から出発する。②主題は期間内に仕上げられるよう焦点化できる。③自分で資料を集め，その事実から論理を引き出す。④論旨を一貫する。（テーマ，研究動機，研究目的，研究対象，研究方法，研究結果，考察，結論，論文要旨，キーワーズ）⑤研究を通して新しい知識が得られる。の5点である。

展開方法は，学生が自らの研究疑問に基づき研究課題を設定し，その研究課題を解決に導きうる適切な教員が担当者として決定され，学生は担当教員の指導の下に論文を完成させるというものである。成績は担当教員が作成過程の状況や成果物をもとに評価し，科目責任者である教務委員長が取りまとめを行う。

２．「卒研ルーブリック」作成のねらい

我々が取り組んだ「卒研ルーブリック」作成のねらいは，「卒業研究」に関して学生の主体的な学修を支援し，客観的・公平な学修評価システムを構築することである。卒業研究の評価は研究デザインが様々であることを前提とするため，どのような研究デザインでも活用できるものを作成することを目指した。

3．「卒研ルーブリック」作成期間

2017（平成29）年6月～2018（平成30）年2月

4．「卒研ルーブリック」作成から完成まで

1）作成に向けての準備

WGの全メンバーが「ルーブリック評価」に初めて取り組む状態でスタートした。

まずは，全メンバーが「ルーブリック評価」に対して一定の知識を持つとともに，完成図のイメージを一致させるために，関連研修を受講し，「卒研ルーブリック」に関する先行研究[12-13]を精読した。次に，「卒研ルーブリック」がどのような研究デザインの論文に適用されることになるかを把握するため，2016（平成28）年度の卒業研究97編を研究デザイン別に集計し，傾向を確認した。その結果，調査研究37.1％，事例研究40.2％（うちプロセスレコードを活用した研究79.5％），文献研究20.6％，実験研究3.1％であり，特定の研究デザインに偏ってはいないことが明らかとなった。さらに，全メンバーが各研究デザインで高評価であった卒業研究を1～２編読み，内容と成績評価を確認した。それらの情報をもとにメンバー間で検討した結果，どのような研究デザインであっても論文の内容は到達目標を達成していると意見が一致し，研究デザインによる評価の差はないと共通認識した。これらのことから，研究デザインに拠って評価内容を変える必要はなく，どのデザインでも求められている内容を理解できる表現を探す必要があることが確認できた。

2）「卒研ルーブリック（案1）」の作成

まず，学生と教員が共通して用いる評価観点と評価尺度が定まってから点数配分を検討することとした。

（1）評価観点の検討

評価観点とは課題が求めている具体的なスキルや知識のことであり，卒業研究では「到達目標」がこれに相当する。上述の過程で従来の到達目標が「卒業研究」の学修目標として不適切ではなかったことを確認した。そこで，原則として従来の到達目標の意味内容はなるべく変えず，成績評価基準の明確化を主眼に評価観点としての到達目標の表現を検討することにした。評価観点の検討においては，学生の主体的な学修行動を促すために評価観点である到達目標が学生からも容易に理解できる表現にするとともに，基礎学力として「学力の3要素」を充たしていることを重視した。

「学力の3要素とは，学校教育法第30条第2項において，小学校教育で「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力をはぐくみ，主体的に学習に取り組む態度を養うことに特に意を用いなければならない」と規定されているものである。大学教育においては，「社会で自立して活動していくために必要な力という観点から捉え直し，高等学校教育を通じて（ⅰ）これからの時代に社会で生きていくために必要な，『主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）』を養うこと，（ⅱ）その基盤となる『知識・技能を活用して，自ら課題を発見しその解決に向けて探究し，成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力』を育むこと，（ⅲ）さらにその基礎となる『知識・技能』を習得させること。大学においては，それを更に発展・向上させるとともに，これらを統合した学力を鍛錬することとされている[14]。つまり，大学において求められる「学力」として，「態度（主体性・多様性・協働性）」「思考力・判断力・表現力等」「知識・技能」と表現され，初等教育から高等教育にかけて，より複雑で高度な能力として育成されることが求められているといえる。

これらの3要素が「卒業研究」の学修過程で育成できるよう，まずは到達目標にすべての要素が抜けなく網羅されていることを意識して表現した。ただし，卒業研究作成に伴う学修上の到達目標は複雑な要素を含んでいるため，学力の3要素と1対1で対応させるには限界がある。そこで，各到達目標のねらいに最も近いと考えられる要素を置き，3要素の偏りがないことを確認しながら作成を進めた。その結果，

評価観点としての到達目標は，「（旧）①研究テーマは看護的な経験から出発する」が「（新）①看護的な経験をもとに研究テーマを設定できる：知識・技能（学力の3要素）」に，「（旧）② 主題は期間内に仕上げられるよう焦点化できる」が「（新）②研究期間に仕上げることができる研究計画を立てることができる（研究テーマの設定を含む）：知識・技能」に，「（旧）③自分で資料を集め，その事実から論理を引き出す」が，「（新）③データ収集ができ，その事実から論理を引き出すことができる：思考力・判断力・表現力」に，「（旧）④論旨を一貫する。（テーマ，研究動機，研究目的，研究対象，研究方法，研究結果，考察，結論，論文要旨，キーワーズ）」が，「（新）④論旨の一貫性，根拠の明確性をもち，論文作成のルールに則った表現で論文を記述できる：思考力・判断力・表現力」に，「（旧）⑤研究を通して新しい知識が得られる」が「（新）⑤研究への取り組みを通して個人の学び（研究成果・看護や研究への理解）を深めることができる：知識・技能」に修正された。

このような検討を進める中で，従来の到達目標には学力の3要素の「態度（主体性・多様性・協働性）に相当するものが明文化されていないことが浮かび上がった。これは当初，学修すべき「態度」がそれぞれの項目に包含されていると考えられていたことによるものと推測された。しかし，我々は，研究における「態度」は，初めて研究に取り組む学生にとっては身につけるべき重要な学修内容と考えた。中でも「研究倫理」と「主体的に取り組む態度」は必ず身につけてほしい態度の項目として位置づけて，あえて明文化した。そこで，「（新）⑥倫理的配慮のもとに研究を進めることができる：態度」「（新）⑦研究への取り組みを通して，研究者としての態度を身につけることができる：態度」の2つの到達目標を追加した。

さらに，これらの到達目標は初めて論文作成に取り組む学生にとっては抽象度が高く，目標達成に向けた行動化に至りにくいと思われた。そこで到達目標の下位項目という意味で，具体的な行動を『内容項目』として加えた。例えば，「（新）①看護的な経験をもとに研究テーマを設定できる：知識・技能」を到達するために，『研究テーマ（リサーチクエスチョン）を看護の体験や問題意識に基づいたものに設定した』と『研究成果が看護にどのように貢献できるかを考慮し，研究テーマを設定した』ができたのかどうかについて，学生は自己評価しながら学修を進めることができるようにした。このことで，教員にとっても指導すべき方向性が明確になることを期待している。

以上の検討を経て，「卒研ルーブリック」の評価観点として，7つの到達目標と27の内容項目を設定した。

（2）評価尺度の検討

評価尺度は，どのような学修行動や成果がそれを満たしていると判断したらよいのかを表現するものである。我々は，実際の学生が取りうる学修行動や成果を想定し，現実との乖離を少なくすることを意識して検討を進めた。

“初めてルーブリックを作る場合は3段階の行動レベルに限定するとよい”[15] とされているため，手始めに「3.十分到達できている」「2.期待されるレベルには到達している」「1.努力を要する」と設定し，評価基準を想定した。ところが，3段階では「2＝普通・標準的」の評価を受ける学生が多数を占めてしまうことが予測された。また卒業研究の場合，論文として仕上げるまでには必ず教員の指導が加わるため，成果物である論文だけでは学生の修得した能力を評価できない，という科目上の特徴がある。そのため，学生の学修過程の評価には，表に出てこない教員の支援の程度による評価の重みづけを考慮する必要があると考えた。そこで，評価尺度を1段階増やした4段階とし，「4.教員の助言（ヒントレベル）を得たのちは自力で十分到達できた／わずかな助言ののちは自力でできた」「3.教員が助言・指導を一部することによって，期待されるレベルには到達できた。（研

究の進め方の助言や表現の手助けなど）」「2.教員の助言・指導によって，期待されるレベルに到達できた」「1.教員の相当の助言・指導によってようやく到達できた」と設定することにした。

しかしこのような評価尺度では評価基準となる内容が多岐にわたり，出来上がった表が巨大なものになると推測された。ルーブリック表は，学生と教員の学修目標についての共通認識を図るツールであるため，「簡潔さ」「わかりやすさ」は重要な要素である。取り組む研究デザインもさまざまであるため，それらに共通する表現として，評価基準を具体的な記述にするには無理があることに気づかされた。最終的に，評価基準をシンプルな数字表記とすることでA4サイズ1枚に収め，実際の運用において各担当教員の指導に応じた内容を想定してもらって活用することが適切と考えた。

以上の検討を経て，評点にかかわる部分を除いた「卒研ルーブリック（案1）」（表１）が完成した。

３）「卒研ルーブリック（案1）」から完成まで

「卒研ルーブリック（案1）」は，2018（平成30）年1月，WGの上部組織である教務委員会で検討議題にあげ，内容や配点等について意見を求めた。教務委員会は普遍・専門基礎・専門分野部会の委員で構成されているため，それぞれの部会に持ち帰り，意見を出してもらった。各部会から出された意見は，評価観点や評価尺度の表現や配点の傾斜に関するものであり，到達目標の解釈の違いが根底にあると推測された。また，評価尺度としては5段階の方が評価しやすいとの意見が出された。これらの意見をもとに，到達目標の解釈にずれが生じないために「全教員が共通認識しやすく」「簡便で」「評価の根拠が学生にもわかりやすい」ものであるよう，「卒研ルーブリック（案2）」に修正した。具体的な修正内容は次の2点である。1点目は，評価観点として「卒研ルーブリック（案1）」の第6項目にあった「⑥倫理的配慮のもとに研究を進めることができる」を削除することである。その理由は，「倫理的配慮」はそれぞれの項目の実施に伴うものであるため，殊更にあげる必要はないと考えられたからである。これにより評価観点は6項目となった。2点目は，評価尺度を5段階とすることである。表現としては，2017（平成29）年度入学生から適用している成績評価の区分に準じ，「5：到達目標90～100％達成（特に優秀な水準で到達目標に達している）」「4：到達目標80％達成（優秀な水準で到達目標に達している）」「3：到達目標70％達成（到達目標に達している）」「2：到達目標60％達成（十分ではないが到達目標に達している）」「1：到達目標60％未満（到達目標に到達していない）」とした。

各評価基準の配点に関しては根拠となる具体的な指標がなかったので，WGメンバーの経験に基づきその難易度や重要性で重みづけをし，「評価観点1：看護的な経験をもとに研究テーマを設定できる」10点，「評価観点2：研究期間に仕上げることができる研究計画を立てることができる（研究テーマの設定を含む）」10点，「評価観点3：データ収集ができ，その事実から論理を引き出すことができる」20点，「評価観点4：論旨の一貫性，根拠の明確性をもち，論文作成のルールに則った表現で論文を記述できる」30点（そのうち，『論文全体』10点，『留意すべき点』20点），「評価観点5：研究への取り組みを通して個人の学び（研究成果・看護や研究への理解）を深めることができる」10点，「評価観点6：研究への取り組みを通して，研究者としての態度を身につけることができる」20点とした。

さらに，科目の単位取得の判断を明確にするため，評価尺度への配点の細分化においてすべての内容項目で「2：到達目標60％達成（十分ではないが到達目標に達している）」となった場合が60点となるように点数設定をした。「1：到達目標60％未満達成（到達目標に到達していない）」の項目は，評価尺度2の点数未満の範囲で，指導教員が任意で採点することとした。また，「5：到達目標90～100％達成（特に優秀な水準で到達目標に達している）」は90～100％であるので，10点配点の内容項目は9～10点，

表１　卒研ルーブリック（案1）

通し番号	到達目標 **（これまでの到達目標の表現** →今回提案する到達目標 【 】は学習の3要素）	内容項目		4 教員の助言（ヒントレベル）を得たのちは自力で十分到達できた／わずかな助言ののちは自力でできた。	3 教員が助言・指導を一部することによって、期待されるレベルには到達できた。（研究の進め方の助言や表現の手助けなど）	2 教員の助言・指導によって、期待されるレベルに到達できた。	1 教員の相当の助言・指導によってようやく到達できた。
1	1.*研究テーマは看護的な経験から出発する。* **→看護的な経験をもとに研究テーマを設定できる。** 【知識・技能】	研究テーマ（リサーチクエスチョン）を看護の体験や問題意識に基づいたものに設定する。		4	3	2	1
2		研究成果が看護にどのように貢献できるかを考慮し、研究テーマを設定する。		4	3	2	1
3	2.*主題は期間内に仕上げられるよう焦点化できる。* **→研究期間に仕上げることが可能な研究計画を立てることができる（研究テーマの設定を含む）。** 【知識・技能】	＜文献検索＞ 取り上げた研究テーマやリサーチクエスチョンについて、適切な文献検索ができる／先行研究のクリティークができる。		4	3	2	1
4		＜研究テーマの絞り込み＞ 取り上げた研究テーマやリサーチクエスチョンがどのような構造で成り立っているか考え、研究テーマの絞り込みができる。		4	3	2	1
5		＜研究期間を考慮した研究テーマの設定＞ 期間内に追究可能な研究テーマの絞り込みができる。		4	3	2	1
6		＜研究期間を考慮した研究計画書の作成＞ 期間内に実施可能な研究計画書を作成できる。		4	3	2	1
7	3．*自分で資料を集め、その事実から論理を引き出す。* **→データ収集ができ、その事実から論理を引き出すことができる。** 【思考力・判断力・表現力】	＜データ収集と整理＞ 研究目的に合った適切な方法でのデータ収集、集約・整理（データ入力・逐語録作成・プロセスレコード作成など）ができる。		4	3	2	1
8		＜データの分析＞ データの意味を取り出すことができる（図表、カテゴリー分類表、プロセスレコードの意味の取出しなど）。		4	3	2	1
9		＜分析結果の解釈＞ データの分析結果を適切に解釈できる。		4	3	2	1
10	4.*論旨を一貫する（テーマ、研究動機、研究目的、研究対象、研究方法、研究結果、考察、結論、論文要旨、キーワーズ）。* **→論旨の一貫性、根拠の明確性をもち、論文作成のルールに則った表現で論文を記述できる。** 【思考力・判断力・表現力】	論文全体	＜一貫性＞ 研究テーマから結論に至るまで、研究目的から逸脱せず一貫している。	4	3	2	1
11			＜論文表現＞ 読み手に伝わりやすい文章で記述している。日本語として正確に表現できている。	4	3	2	1
12			＜提出規定の遵守＞ 論文は卒論提出規定に則って作成されている。	4	3	2	1
13		特に留意すべき部分	＜結果＞ 結果はわかりやすく具体的に述べられている。	4	3	2	1
14			＜考察1＞ 考察は結果にもとづき論述している。	4	3	2	1
15			＜考察2＞ 考察は、結果の解釈、推論、他の研究結果との比較検討などから自分の考えを論述している。	4	3	2	1
16			＜本研究の意義と限界＞ 作成した論文の意義と限界を明確に表現できている。	4	3	2	1
17			＜論文要旨＞ 論文要旨は本文の内容を過不足なく端的に表現できる。	4	3	2	1

通し番号	到達目標 *(これまでの* *到達目標の表現* →今回提案する 到達目標 【 】は学習の3要素)	内容項目	4 教員の助言（ヒントレベル）を得たのちは自力で十分到達できた／わずかな助言ののちは自力でできた。	3 教員が助言・指導を一部することによって、期待されるレベルには到達できた。（研究の進め方の助言や表現の手助けなど）	2 教員の助言・指導によって、期待されるレベルに到達できた。	1 教員の相当の助言・指導によってようやく到達できた。
18	5．*研究を通して新しい知識が得られる。* **→研究への取り組みを通して個人の学び（研究成果・看護や研究への理解）を深めることができる。** 【知識・技能】	＜研究成果＞ 研究目的に対して明確な結論を導くことがでいる。（新しい知見を得るレベル・再確認レベル）	4	3	2	1
19		＜看護や研究に対する理解の深まり＞ 研究に取り組む前と比較して、看護や研究に関する理解の深まりや新しい発見を得ることができる。	4	3	2	1
20	6．（新規）**倫理的配慮のもとに研究を進めることができる。** 【態度】	＜データ収集＞ 倫理的配慮をもってデータ収集ができる。	4	3	2	1
21		＜論述＞ 倫理的配慮をした論述ができる。	4	3	2	1
22		＜データ管理＞ 研究に関する資料や情報を適切に管理できる。	4	3	2	1
23	7．（新規）**研究への取り組みを通して、研究者としての態度を身につけることができる。** 【態度】	＜真面目さ＞ 研究に対して真摯（真面目でひたむき）に取り組むことができる。"	4	3	2	1
24		＜積極性＞ 知的好奇心をもって新しい知識を得ようと積極的に取り組むことができる。	4	3	2	1
25		＜客観性＞ 自分が行っていることに関して、他者の意見を求めつつ、冷静に・客観的に受け止めて研究に取り組むことができる。	4	3	2	1
26		＜自律性＞ 計画性をもって研究を進めることができる。	4	3	2	1
		小計				

※印刷の都合上，表を分割して掲載した。実際はA4サイズである。

成績評価

20点配点の場合は19～20点とし，最も層が厚いと思われる「4：到達目標80％達成（優秀な水準で到達目標に達している）」「3：到達目標70％達成（到達目標に達している）」の配点バリエーションを増やした。

以上をまとめ，採点がしやすいようアプリケーションソフトはマイクロソフト社のエクセルを用い，計算式を埋め込んだ「卒研ルーブリック」を完成させた（表２）。

Ⅳ．おわりに

今回の「卒研ルーブリック」作成にあたっては，完成した卒研ルーブリックが「絵に描いた餅」とならないことを心掛けた。特に苦慮したのは以下の3点である。まず言葉の用い方や表現である。卒業研究の場合，担当教員の専門性や学生が選択する研究手法などバリエーションが豊富なため，どのような場合でも適応可能な表現で，学修内容が満遍なく押さえられてあり，現実的に到達可能な評価観点とし

表２　完成した卒研ルーブリック：教員用（運用例）

平成30年度版

学籍番号		学生氏名	

到達目標	内容項目	配点	到達度レベル 5	4	3	2	1	小計
			特に優秀な水準で到達目標に達している（目安：90%以上）	優秀な水準で到達目標に達している（目安：80%以上）	到達目標に達している（目安：70%以上）	十分ではないが到達目標に達している（目安：60%以上）	到達目標に達していない（目安：60%未満）	
		10点満点	10・9点	8	7	6	5以下	
		20点満点	20・19点	18・17・16	15・14・13	12	11以下	
1．看護的な経験をもとに研究テーマを設定できる。	研究テーマ（リサーチクエスチョン）を看護の体験や問題意識に基づいたものに設定する。 研究成果が看護にどのように貢献できるかを考慮し、研究テーマを設定する。	10		8				8
2．研究期間に仕上げることが可能な研究計画を立てることができる（研究テーマの設定を含む）。	＜文献検索＞ 取り上げた研究テーマやリサーチクエスチョンについて、適切な文献検索ができる／先行研究のクリティークができる。 ＜研究テーマの絞り込み＞ 取り上げた研究テーマやリサーチクエスチョンがどのような構造で成り立っているか考え、研究テーマの絞り込みができる。 ＜研究期間を考慮した研究テーマの設定＞ 期間内に追究可能な研究テーマの絞り込みができる。 ＜研究期間を考慮した研究計画書の作成＞ 期間内に実施可能な研究計画書を作成できる。	10		17				17
3．データ収集ができ、その事実から論理を引き出すことができる。	＜データ収集と整理＞ 研究目的に合った適切な方法でのデータ収集、集約・整理（データ入力・逐語録作成・プロセスレコード作成など）ができる。 ＜データの分析＞ データの意味の取り出しや解析ができる（図表やカテゴリー分類表の作成、プロセスレコードの意味の取出しなど）。 ＜データ収集＞ 倫理的配慮をもってデータ収集ができる。 ＜データ管理＞ 研究に関する資料や情報を適切に管理できる。	20		18				18
4．論旨の一貫性、根拠の明確性をもち、論文作成のルールに則った表現で論文を記述できる。	論文全体 ＜一貫性＞ 研究テーマから結論に至るまで、研究目的から逸脱せず一貫している。 ＜論文表現＞ 読み手に伝わりやすい文章で記述している。日本語として正確に表現できている。 ＜倫理的配慮＞ 倫理的配慮をした論述ができる。 ＜提出規定の遵守＞ 論文は卒論提出規定に則って作成されている。	10		8				8

到達目標	内容項目		配点	到達度レベル 5	4	3	2	1	小計
				特に優秀な水準で到達目標に達している（目安：90%以上）	優秀な水準で到達目標に達している（目安：80%以上）	到達目標に達している（目安：70%以上）	十分ではないが到達目標に達している（目安：60%以上）	到達目標に達していない（目安：60%未満）	
			10点満点	10・9点	8	7	6	5以下	
			20点満点	20・19点	18・17・16	15・14・13	12	11以下	
（続：4．論旨の一貫性、根拠の明確性をもち、論文作成のルールに則った表現で論文を記述できる。）	特に留意すべき部分	＜結果＞ 結果はわかりやすく具体的に述べられている。 ＜考察1＞ 考察は結果にもとづき論述している。 ＜考察2＞ 考察は、結果の解釈、推論、他の研究結果との比較検討などから自分の考えを論述している。 ＜本研究の意義と限界＞ 作成した論文の意義と限界を明確に表現できている。 ＜論文要旨＞ 論文要旨は本文の内容を過不足なく端的に表現できる。	20			15			15
5．研究への取り組みを通して個人の学び（研究成果・看護や研究への理解）を深めることができる。		＜研究成果＞ 研究目的に対して明確な結論を導くことができる。（新しい知見を得るレベル・再確認レベル） ＜看護や研究に対する理解の深まり＞ 研究に取り組む前と比較して、看護や研究に関する理解の深まりや新しい発見を得ることができる。	10		8				8
6．研究への取り組みを通して、研究者としての態度を身につけることができる。		＜真面目さ＞ 研究に対して真摯（真面目でひたむき）に取り組むことができる。 ＜積極性＞ 知的好奇心をもって新しい知識を得ようと積極的に取り組むことができる。 ＜客観性＞ 自分が行っていることに関して、他者の意見を求めつつ、冷静に・客観的に受け止めて研究に取り組むことができる。 ＜自律性＞ 計画性をもって研究を進めることができる。	20	9					9

※「卒研ルーブリック：学生用」は最下段と最右列の評価点の記入欄を削除している。
※印刷の都合上，表を分割して掲載した。実際はA4サイズである。

成績評価	83

て表現することに留意した。次に，評価項目の配点の重みづけがある。学修として優先度が高いものは配点を多くし，平均的な学生であれば一定の点数がとれるように慎重に検討した。さらに，活用のしやすさも重視し，運用の段階で嫌気がささないよう，シンプルで簡便な形式となるようにした。これらのことは，今後別のルーブルック評価表を作成するうえでも重要なことではないかと考える。

今回の取りくみは，開学当時から開講されてきた「卒業研究」の到達目標を見直すよい機会となった。現在の学生がどのような学修を経たうえで取り組んでいるか，実際の学生の多くが到達可能であるか，昨今重要視されている研究倫理上の配慮など，開学時からの情勢の変化を踏まえた目標となったと考える。特に，研究に取り組む態度や倫理的配慮に関する内容は，従来の到達目標ではそれぞれの項目に内包されており，特定の項目としては表現されていなかった。学生の主体的な学修を目指すためには，「含意」をくみ取らせるのではなく，その他の到達目標と同列に挙げ，学生が意識的に取り組めることが必要であろう。

今後の課題としては，この卒研ルーブルックのねらいや活用方法を学生と共有するためのオリエンテーションの工夫が挙げられる。学修進行の途中で教員と学生が互いに使ってみることでも学修効果の向上が期待できる。学生の自己評価と教員の他者評価の一致を目指して，改善点を見いだし，よりよい卒研ルーブリックになるよう検討を続けていきたい。

引用文献

1）糸賀暢子，元田貴子，西岡加名恵（2017）：看護教育のためのパフォーマンス評価-ルーブリック作成からカリキュラム設計へ-，12，医学書院.

2）松下佳代（2007）：パフォーマンス評価-子どもの思考と表現を評価する-，15，日本標準.

3）Dannelle D., Antonia J.Levi.（2013）／佐藤浩章監訳，井上敏憲，俣野秀典訳（2014）：大学教員のためのルーブリック表評価入門，1-180，玉川大学出版部.

4）沖裕貴（2014）：大学におけるルーブリック評価導入の実際－公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して－，立命館高等教育研究，14，71-90.

5）山田嘉徳，森朋子，毛利美穂，他（2015）：学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討，関西大学高等教育研究，6，21-30.

6）山口陽弘（2015）：教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案－パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して_，群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編，62，157-168.

7）平成24年中教審：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）－用語集－.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf　(2018.1.5アクセス)

8）前掲書3)4

9）前掲書3)26

10）相馬伸一（2014）：卒業研究評価ルーブリックの開発-学士課程における教育成果の可視化のために-，広島修道大論集，55(1)，15-31.

11）中島梓（2017）：アカデミック・ライティング教育科目におけるルーブリック使用の成果と課題－立命館大学映像学部における事例をもとに－，立命館高等教育研究，17，199-215.

12）前掲書3)

13）前掲書4)

14）中央教育審議会：新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について ～ すべての若者が夢や目標を芽吹かせ，未来に花開かせるために ～
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm
（2017.12.7アクセス）

15）前掲書3）6

Material

Developing a rubric for graduation thesis

Nobuko Hisano, Misako Nagatsuru, Michiko Kawamura, Erina Katsuno, Yasuko Kurihara

【Key words】graduation research, grading rubric, performance task, undergraduate

Nobuko Hisano, Misako Nagatsuru, Michiko Kawamura, Erina Katsuno, Yasuko Kurihara :
Miyazaki Prefectural Nursing University